

物である薬物を取り入れ、肉体の毒を増加させているとする。それに対して、「浄霊」とは自然良能力を活性化させて肉体的にも霊的にも浄化する方法として位置づけられている。こうした「霊主体従」に目覚め、霊に曇りをつくらないように日々実践していく—例えば良い行為を行ったり、病気になっても薬を飲まないといったこと—ことで、地上天国が実現するとしている¹¹⁾。これまで述べてきたことを、岡田自身の言葉から引用してみよう。

現代医学の誤っている事は～略～人間が先天的に保有している自然良能力を全然無視している～略～病気とはいつもいう通り毒素の排除作用であるから、其俵放っておけば順調に排除されて了い、病気は治るに決まっている。～略～此良能力を尊重し發揮させる方法こそ真の医学であるべきに拘らず、反って其良能力を阻止するのを可として、それを進歩させるのであるから、如何に誤っているかが分かるであろう。～略～処が本教浄霊は其良能力をより強化し、促進させる方法であるから、最も進歩した合理的治病である事を知るであろう（『神示の健康』六七-六九頁）。

元来病気とは肉体に現われた現象であり、結果であって、勿論本原は霊にある。即ち最初霊の一部又は数個所に曇りが発生し、それが体に映って病気となるのであるから、この曇りさえ払拭すれば治るのは明らかである。この様に病原は霊にある以上、体のみを対象とする医学で治らないのも当然であり、対症療法の名がそれである。これにみても現代医学は全く見当違いである以上、一日も早くこれに目覚めて、再出発されなければならないのである（『神示の健康』一一九頁）。

霊に曇りを生じさせるのは見た目に悪い行為ばかりでなく、「霊主体従」の理を忘れること—世界が霊界によって成立しているという事実を忘れたり認めなかったすることも悪い行為とされている。そして、科学は霊界を否定し、かつ霊界の存在を否定する唯物思想を普及させるものであるとして、科学を徹底的に批判している。

この書（『世界救世教奇蹟集』）は科学に対する原子爆弾であり、人類に対する啓蒙書であり、救世の福音でもある。～略～現在の文明に一大欠陥があるからで、その欠陥こそ文化の進歩に対する大なる障礙となっているのである。～略～ではこの欠陥とは何であるかということ、これこそ科学至上主義の誤りであって、現代人は科学によれば何事も解決出来るとする科学過信というよりも、科学迷信の深淵に陥ってしまっている事である。～略～この迷信発生の原因こそは、見えるものを信じ、見えざるものは信ずべからざるとする唯物一辺倒の為である（『御神書（宗教篇）』一八〇頁）。

この科学への批判は具体的には医学—「薬剤迷信」—と人為的肥料¹²⁾・農薬—「肥料迷信」—への批判となって現れている。医学に対しての批判は上述したので、「肥料迷信」についてふれることにする。岡田茂吉は一九三五年といふかなり早くから肥料や農薬を用いない自然農法について説いていた。その自然農法も「霊主体従」、「薬毒論」、そして「浄霊」が基本的原理としてある。土には神によって肉体をもつ人間が生きていくのに足る食物を生産できるような力—「自然力」—を与えられてる。しかし、科学が土の自然力を無視する人為的な肥料を使用させ、その肥毒によって、自然力を損なわせてしまっているとする。そして、自然力を回復させるためには肥料などの使用を止め、肥毒を浄霊によって解消していかなくてはな

11) 今日、<世界救世教系教団>の各々の教団によって差異はあると思われるが、しかし「世界救世教」も「MOA」とも医療行為に関して寛容である。

12) 岡田茂吉は当初「無肥料栽培」という言葉を使用し、一九五〇年以降、「自然農法」、「自然栽培」という言葉を使い出す。なお、岡田の言う人為的肥料とは、化学肥料、人肥、馬糞、鶏糞、魚粕、木灰などを指し、堆肥による自然農法を説く。この点に「MOA」は依拠して、EMの人為性もしくは反自然性を批判し、自分たちが岡田の教えを忠実に継承している点を強調する。しかし、「世界救世教」はこの岡田の教えを無視しているわけではない（新しく編纂された『天国の礎』のなかに、岡田が堆肥による自然農法を強調する箇所は掲載されている）。